

生きる力与えるケア

やまがた健康塾

「がん緩和ケア」テーマに中村医師が講演
県医師会と読売新聞山形支局、山形県読売会が共催する「第1回やまがた健康塾」が15日、鶴岡市みどり町の同市視聴覚センターで開かれた。鶴岡地区医師会理事で中村内科胃腸科医院院長の中村秀幸医師が、「がん緩和ケア」在宅医療での経験と題して講演し、約100人が聞き入った。中村医師は、同医師会が、鶴岡市立荘内病院、鶴岡協立病院と連携して2008年4月から始めたがん在宅緩和ケア事業「庄内プロジェクト」について、自身の診療経験を踏まえて紹介した。



がん緩和ケアに理解を深める聴講者

県内のがん死亡率(2006年)は、人口10万人当たり319.5人で全国4位。中村医師は、ほとんどのがん患者が病院で亡くなる実情に触れ、「患者と家族の意思をどこまでくみ取れるか。プロジェクトにかかっている」とした上で、緩和ケアの原点について「死の受容のケアではなく、生きるための力を与えるケア」と説明。緩和ケアで使われる麻薬への誤解を挙げ、「モルヒネは『最期の薬』ではなく、痛みを訴える患者の全経過中に使える優れた薬。副作用対策を十分にすれば危険ではない」と話した。



がん緩和ケアについて講演した中村医師

庄内プロジェクト 厚労省のモデル事業(3年計画)として鶴岡市と三川町でスタートした。終末期のがん患者と家族が直面する困難を直視し、病院と開業医、訪問看護センター、検査センターが連携して緩和ケアチームを構成、急変時の対応や連絡体制などについて緊密に連絡を取り合い、在宅での治療を支える。患者の希望に応じて、①早期から緩和ケアを受けられる体制②自宅で安心して療養できる環境——を目指す。診療情報の管理は、同地区医師会が02年に導入した医療情報ネットワーク「Net 4 U」が威力を発揮している。

近い人が病院で亡くなっており、「3年間でしっかりとした実績を残し、その先につなげたい」と話した。また、「一生懸命患者に力をつけていく」と語り、鶴岡地区医師会の「Net 4 U」を活用し、日々、新しい患者情報を共有できる

利点を強調。「鶴岡地区ならでは『鶴岡方式』を確立していききたい」と述べ、「家に帰ってきてよかった、と言ってもらえる緩和ケアを目指したい」と締めくくった。講演後のQ&Aでは、市内の女性から「医療は生活を支えるものと説明があっ

平成百景

県内2件選出

観光客増に期待

読売新聞創刊135周年を記念する「平成百景」が16日、発表され、県内からは「蔵王」が28位につけ、「山寺」も入選を果たした。関係者は観光、文化資源などとして認識を新たに、魅力と今後の展望を語った。



温泉街中心地の川原湯共同浴場裏の湯だまりを確認する堀さん

蔵王 樹氷原歩きも人気

「蔵王の名に恥じないよう、地区一丸となって観光客を迎え入れたい」。蔵王温泉の民宿に生まれ、30年近く蔵王の観光に携わる蔵王温泉観光協会理事の堀利重さん(49)は身の引き締まる思いで語った。蔵王の魅力は「広大なス

「蔵王」と「山寺」には、県内外から多くの投票をいただきました。その一部を紹介します。

◆蔵王◆

さいたま市南区文蔵、無職横田清二さん(73) 40年ほど前、リフトの終着点から見るダイヤモンドダストの美しさは、この世の出来事ではないと感じました。しばしばうぜんとしながら、幸せ気分ですキーを楽しみました。

気といい、「観光客の多様なニーズに応えられるかが鍵」と話す。ウオン安の影響で昨年から外国人観光客は減少傾向だが「団塊の世代」がスキーや温泉を目当てに戻ってきており、落ち込みは少ないという。さらに「温泉街の整備や、外国人観光客向けのサービスなど、まだまだ伸びる余地はある」と意気込んだ。